

16. 乳用育成牛の発育改善指導の取り組み

東部振興局生産流通部畜産班

○宮内美香・藤田和男

【背景・目的】

近年、初妊牛価格は高騰しており、導入による更新は厳しく、自家育成による後継牛の確保が必要と考えられている。育成期の発育の差で分娩月齢や乳量に差が出るとされており、牛自身の遺伝的潜在能力を十分に発揮させるためには、育成期の飼養管理が重要である。しかし、育成期の飼養管理の重要性を理解しながらも、そこに重点を置いている農場はあまり多くない。

そこで、将来の乳量増加に向け、育成牛の発育改善指導の取り組みを行った。

【取組内容】

改善が必要と考えられた農家において、現状把握、原因分析、改善方法の検討を行い、改善の実施、検証を行った。

(1) 農家の概要

タイストール・パイプライン搾乳(キャリロボ、自動給餌機付き)

経産牛：90頭 育成牛：50頭

飼料作付け面積：8ha(スーダングラス・イタリアンライグラス)

労働力：4人(搾乳：本人夫婦、哺育・育成：親夫婦)

育成牛の飼養管理は、管理区分として哺乳、育成Ⅰ、育成Ⅱ期、育成Ⅲ期(初妊含む)の4つに分かれている。

(2) 発育状況

育成牛の体測(体高・胸囲)を行い、発育状況を調査した。発育値の基準は全国ホルスタイン協会の月齢別標準発育値を用いた。

哺乳・育成Ⅰ：体高・胸囲ともに平均値を大きく上回っており、発育は良い。

育成Ⅱ期：体高は6頭中4頭、胸囲は6頭中3頭が平均を下回った。

育成Ⅲ期：4頭中2頭が体高・胸囲ともに平均を下回った。

(3) 原因分析

体測結果及び飼養管理方法の聞き取りから問題点として以下が考えられた。

①飼料設計において、コスト面を重視した給与内容となっていたため、給与CPが低い。

②スタンションの取り付け位置が低く、首に当たっているためエサを食べにくい。

(4) 改善方法の検討・提示

県酪を交え、給与飼料の見直し他を検討し、実行した。